学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
２０１４年２月２２日
文責：ＪＵＮ

文学の味わいに満ちた教室に

文学の授業と言えば、これまで、登場人物の気持ちを読み取るもの、登場人物の言動のわけを明らかにするもの、主題が何かを考えるものだと考えられてきたのではないでしょうか。何の疑いもなくそうするものだと思い込んでいた文学の授業ですが、今、そのことを考え直してみなければならないと考える人が増えてきました。なぜなら、何がなんでも「気持ちは」と問うことで必要以上に人物の心情に入り過ぎ、文学の読みを一面的にしてしまったという反省があるからです。また、人物の言動のわけを知るために、やたら「なぜ」「どうして」と考えるようになり、読みを単なる謎解きにしてしまい、文学は、「わかる」ものではないのに「わかる」ことに走らせてしまったという後悔があるからです。さらに、主題の言語化が最終的な読み方であるかのような指導をし、作者がこの作品の主題はこういうことだなどとひと言も言っていないのに、「作者が言いたかったこと」を主題としてわからせる授業を横行させてしまったのではないかという危惧を感じているからです。

これを仮に文学の授業の「三つのあやまり」と言い表すとすると、それを改めることで文学本来の「味わい」を子どもたちにもたらすことができるのではないでしょうか。しかし、日本の教室で行われてきた文学の授業は、あまりにも深くこの「三つのあやまり」に浸蝕されていて、その浸蝕から抜け出すことは容易ではない状態です。

そこで、この「三つのあやまり」にとらわれない文学の授業を実現していくために、基本的にどういうことが大切なのかについて述べることにします。このわたしの問題提起に共感してくださった皆さんは、ぜひ実践に移してください。しかし、この授業の転換はすぐに実現するほど簡単なことではありません。少なくとも一年間という長いスパーンで取り組む必要があります。２月のこの時期に問題提起することを思い立ったのは、あと一か月で新しい年度が始まるからです。新年度の始まりまでに、ぜひ、わたしの問題提起を受けとめていただき、４月からの新しい学級で、思考錯誤の連続になるとは思いますが一年間の取り組みをしていただければうれしく思います。

１　文学の読みの原則は？

まず、実践していただく先生方に、文学の読みの原則を了解していただきたいと思います。

その第一は、文学を読むとは「わかる」ことを目指すのではなく「味わう」ようにすることだということです。文学は芸術の一分野です。言葉で表す芸術です。そもそも芸術の鑑賞

に正解はありません。一幅の名画を鑑賞したときその魅力の感じ方がさまざまになるのと同じことです。文学の読みには「多様さ」が存在しているのです。ですから、読者は、それぞれに自分の味わいを求めて読むことになります。

もちろん、だれが考えてもそうは読めないという読み誤りはあります。多様だと言っても、どんな読み方もすべて認められるというものではないでしょう。ことばによって、ことばの連なりによって綴られたものが文学ですから、ことばの相関関係によって、読みの範囲はあると考えるべきです。その範囲のなかでさまざまな描き方・感じ方が生まれるのです。そこに文学の魅力があると言えます。このことから、まずはっきり自覚しなければいけないのは、文学の授業を教師の解釈を教える授業にしないということです。

そこで、二つ目の原則が浮上してきます。それは、「ことばに密着して読む」という読み方を徹底して行うようにするということです。前述したように、文学はことばで表す芸術なのですから、ことばに密着しないで味わえるはずがありません。第一の原則の「多様さ」ばかりを前面に立て、好きなことを言わせている授業では文学の読みにはなりません。

よく授業のはじめに音読をさせて、その後は子どもたちに読み取りと称する考えの発表に終始し、授業の終わりに申し訳程度に音読するという授業がありますが、それは、ことばに密着した文学の授業とは言えません。文学の授業を「話し合い」に終始するものにしてはなりません。それでは、作品のことばからどんどん遠ざかり、思いつきのオンパレードになったり、作品とは異なるところを勝手にさまよったりする読み方になります。文学の読みの深さは、作品のことばにどこまで深く食い込めたかで決まります。そういう意味では、授業の中の音読が極めて大切です。

三つ目に述べる原則は、「読み描く」読み方を大切にするということです。これは、文学の授業においてなんとしても具現化してほしいことです。

文学にはほとんどの場合登場人物がいます。その人物がさまざまな出来事をつくりだし、その出来事を通じてさまざまな体験をしながら生きています。読者は、その登場人物の生み出す世界を自分の心の中に引き込み、心のなかで、自分もその世界を生きることになるのです。そこに、文学の楽しみがあります。

だとすると、読者である子どもたちは、作品の舞台となっている所がどういうところで、そこで、登場人物がどのように行動し、どう心を動かしているのかがみえなければなりません。それは、あたかも自分がその世界のなかで体験しているかのような心持ちになることでしょう。そこで子どもたちがみているもの、それは、文中のことばによってつくり出される「状況」です。つまり、文学を読むとは、ことばに密着して作品の「状況」を「読み描く」ことなのです。だとすると、状況の読み描きをしないで、作品の世界で生きることもせず、さらっと読んだだけでこの作品の主題はああだこうだと論じることは極めて不適切だと言えます。教師は、文学の味わい方の基本である「読み描き方」を子どもたちが身につけるよう指導する必要があります。

２　文学の授業の三つの活動

文学の授業の活動として忘れてはならないことが三つあります。

一つは、音読を多用するということです。常に、ことばに密着するため、何を考えるためかという目的をはっきりさせたうえで、何度も何度も音読を入れるのです。これは、「ことばに密着して読む」という原則を具現化するうえで極めて重要なことです。

二つ目は、互いの気づきを聴き合うことを大切にするということです。文学の読みが多様だからこそ聴き合う必要があるのです。一つの解釈に行き着くために聴き合うのではありません。自分の読みをはっきりさせるため、多様な他者の考えに触れる必要があるからそうするのです。そのことによって、自分では曖昧な触れ方をしていたことばへの発見・気づきをすることもできます。文学の授業が学び合いによる授業になるという所以はここにあります。

三つ目は、授業を教師対子どもという図式にしないで、子ども同士のかかわりによる学び合いとして行うということです。聴き合いの学びにするためです。そのため、全体学習では、子どもが互いに顔を見合うことのできるコの字の机の並びにする必要があります。しかし、それだけでは不十分です。大勢での学び合いに全員の子どもが参加することが難しいからです。そこで必要のなるのがグループです。グループの学び合いは必須です。

３　文学の授業における教師の役割

では、それらの活動において教師はどういう役割を果たせばよいでしょうか。

まず、ここまでに述べてきたことからはっきりしているのは、解釈を教える、分からせるのが役割ではないということです。子どもがそれぞれにその作品を味わえるよう、互いに聴き合って味わいを深められるようにするのが役割だと言えます。

けれども、それは、何も教えてはならないとか、発問してはならないということではありません。そこのところを誤解すると、教師は何もしてはならないということになってしまいます。そうではありません。

文学は味わうものだということを知らない子どももいます。ことばに密着して読むことを体験していない場合もあります。聴き合う体験をほとんどしてこなかったという子どもたちに出会うこともあります。読み描くとはどうすることかが分からない子どもになっている場合もあります。もし、そういう子どもたちと一年を過ごすことになったら、まずは、それらのことを丁寧に指導しなければなりません。子どもが、自ら文学の世界に豊かに浸れるようになるまで、教師がどれだけの指導と援助ができるかが鍵だと考えてください。

かなりの文学の読みができる子どもに育っている場合でも、教師の役割は重要です。子どもに任せ、好きなように読ませておいてよいということではありません。子どもの読みの状

況を逐一とらえ、それが深まるための手を打たなければならないのです。それは、テキストにした作品を読み込み、子どもの読みがみえ、子どもとともにさらに読みの深まりを目指す教師にしかできないことだと言えます。

実は、それよりも前に大切な教師の役割があります。あえてここまで述べてきませんでしたが、これがもっとも大切な役割だと言っても過言ではありません。それは、どういう作品をテキストとするかを選定することです。考えてみてください。粗悪なもので深い味わいが生まれるはずがないでしょう。そもそも、子どもの前にどういう作品を提示するかで、子どもの文学体験の豊かさは決まるのです。

このことをなぜ最後に持ち出したかということですが、それは、教科書通りに授業をしている教師がほとんどだからです。つまり、いわゆる教材選定は意識の外になっているのです。だから、持ち出すテキストが文学の味わいの深さを左右しているという、考えてみれば当たり前のことが忘れ去られているのです。教科書通りに授業をしてはいけないということを言っているのではありません。教科書の作品で授業をするときも、この作品こそという思いがわくものに時間をかけるなど軽重をつけ、教師がその作品にしっかり向き合う必要があるということを言いたいのです。「何をテキストとするか」に心を砕かないでは、子どもの文学体験を豊かにすることはできません。

４　新しい学級で文学体験を積む

４月になると、新しい学級の担任になったり、国語科の担当になったりするでしょう。そしたら、まず、子どもたちの文学の味わい方がどの程度のものか見極めてください。そして、それが十分ではないと判断したら、少なくとも夏休みまでの期間で、文学の味わい方に慣れるように指導することです。

ことばに密着して読もうとする子どもを育てるのです。読み描くという読み方ができる子どもを育てるのです。文学の味わいを楽しもうとする子どもを育てるのです。自分の読みを求めて読もうとする子どもを育てるのです。文学の読みの多様さから学ぼうとする子どもを育てるのです。他者の読みを尊重しながら学び合える子どもを育てるのです。

ことばに密着して読むことを体験するためには、数多い文中のことばのなかから、どれかに光を当てて、そのことばからどういうことが読めるのかが体験できなければなりません。ですから、最初は、教師がそのことばを指し示す必要があります。考えに考え抜いた末に選んだことばを子どもの前に指し示し、そのことばから豊かな読みを引き出し、ことばにしっかり触れればこんな読みができるということを感じさせなければなりません。夏休みまでに、この学びがどれだけできるかで、子どもの読みの力は違ってきます。

読み描き方についても同様のことが言えます。どういうことばをどのように考えれば読み描くことができるかが体験できるような指導をしなければなりません。ここでは登場人物の

気持ちを問うことを封印します。作中のことばを手がかりに、作品の世界を描き出していくようにするのです。このことを「情景を読む」ことだとか「「様子を考えさせる」ことだと短絡的に受け取る人がいますが、それは一面的な受けとめ方です。情景や様子もふくめたその場面の「状況を読む」ということでなければなりません。あたかも自分がその世界のなかにいる、または直接眺めているように読んでいくということです。そうすれば、情景も人物の様子も、その人物や宿している心情も気配も、そのすべてが直接問わなくても浮かび上がり、その場面をまるごと味わうことができます。そういう読み方を、教師がことばを指し示して、そうなるように読ませていくのです。

この段階で、子どもたちが嬉々として行うようにしたいことがあります。それは音読です。作品の世界を味わううえで音読は大変有効な活動です。何よりもことばを目でとらえ、それを自分の声に乗せるということで、そのことばが体内に深くしみこむからです。ことばに密着するために音読は欠かせません。ですから、音読をする機会をたくさん設定し、作品の世界を味わう、音読によって自分が描く作品の世界を表す、音読によって仲間と作品の世界を味わい合う、そのことがどれだけ楽しく魅力的なことかを感じさせる必要があります。それには、教師こそが音読の評価につきものの外見的な聴き方から脱却する必要があります。声の大小、強弱、読む速さといった評価を子どもにさせてはなりません。あくまでも、作品の味わいを深める音読にしなければならなりません。ことばに触れる音読にしなければなりません。ここは、大きな分かれ目です。教師の耳と文学的感覚が大きく左右することです。

このような指導が少しずつ進んできたところで、やっておきたいことがあります。それは、教師にことばを示されるのではなく、自分でことばを探し、そこで自分の読みを生み出すという体験をさせることです。３年生以上なら「書き込み」をさせることになります。しかし、長い文章でおこなうのはよいことではありません。抵抗感を覚える子どもがいるだろうからです。良質の短い文章で行うことで抵抗感は減少できます。ある一場面を選定して行うこともよいでしょう。

また、何をどう書きこんでよいか分からない子どもに対する個別指導、グループの学び合いが不可欠です。そのとき教師として大切にしたいのは、子どもの書き込みが「なぜ」「どうして」にならないよう指導することです。そのうえで、子どもが書いてくるものを楽しみにするという気持ちを忘れないことです。書いてほしいことだけを期待するのではなく、どんな書き込みが生まれるかとわくわくさせて待ち、後でうんと褒めることです。この小さな体験を少なくとも２回ほどすることで、子どもたちは自分で読むということの快感を覚えます。

文学を読むということは楽しいこと、素晴らしいことという思いが抱けるようにするのは教師の役割です。学級が始まって二か月ほどの間に行う授業で、そういう事実が出せるかどうかはかなり大きなことです。しかし、それは、どの教師でも簡単にできることではありません。そこで、文学を読む楽しさを子どもたちに伝える方法としてわたしがお勧めするのは、読み聞かせやブックトークといった手法を使った「読書タイム」の設定です。

まずは、教師が子どもの本を何冊も読むことです。そうすれば、この本を子どもたちに読んでやりたいという本に出合えます。そうしたら、どのようにそれを持ち出すかというプランを練るのです。読み聞かせにするかブックトークにするか、どういう演出をして子どもと本を出合わせるか、などと考え抜いて、それを実行に移すのです。うまくいかないこともあるでしょうし、教師の想定したほど子どもが喜ばなかったということもあるでしょう。それでも、何度も何度も実行していくのです。子どもたちの文学体験は、この積み重ねによって次第に深まっていきます。

かたや、ことばに触れる読み方、読み描く読み方を丁寧に指導し、もう一方で、細かいことは言わずたくさんの作品に出合う機会を設ける、こういう教師の意図的な「文学体験の設定」が、夏休み以降の子どもによる文学の授業の礎になるのです。

５　子どもの読みをもとに深める授業に

夏休みが明けたら、それまでに行っていた教師のリードによる授業から、次第に子どもから読みが生まれ学び合う授業に進展させていきます。子どもたちは、夏休みまでに培った「ことばに触れて読み描く」という読み方が身につき、自分の味わいを音読で表すことが楽しくなっているはずです。３年生以上なら、自分の読みを書き込むこともできるようになっています。

そうしたら、今度は、子どもが読んでくるものを受けとめ、そこから学び合いで読みを深める授業を目指すのです。ここからが、本格的な文学の授業になります。

わたしが夏休みまでと述べて記してきたようなことがなされないまま、子どもの読んできたものを言わせるだけの授業があります。そういう授業では、子どもの読みが浅いところに留まっていたり、勝手な読み方が横行したりします。そのうえ聴き合えません。だから読みが深まりません。その状況で、教師が何の対応もせず、子どもに言わせたいだけ言わせていると、発言は多くてもわいわいとやかましいおしゃべりの時間になってしまいます。そうはしたくありません。

子どもがじっくり読んできたことが出され、その考えをみんなでじっくり温かく、しかしし真摯に聴きとって文学の味わいを深める授業にしたいものです。そうするために、学び合う授業における教師の役割がまたまた大切になります。どれだけ夏休みまでに文学の読み味わい方を身につけたとしても、子どもだけで深めていけるほど容易なことではないからです。そこには、子どもの読みを尊重しながら、子どもとともに作品を味わいながら、その深まりに対して手を打つ教師の役割が存在します。本号ではそのことについてまでは触れないこととします。簡単には述べられないことだからです。いずれ、事例に即して述べるようにします。

もうすぐ４月です。皆さんの教室がどんな素敵な「文学の味わいに満ちた」ものになるか楽しみにしています。とにかく丁寧に、見通しをもって一つひとつ積み上げていってください。